

すね。

○夫婦の基本は コミュニケーション

牧師夫人の多くが、牧師以上にストレスを抱えています。この世の奥さん方も、「私のストレスは、夫です」などと言っています。

牧師夫人の定義づけなどはどこにもないでしょう？　その分、信徒の方々はそれ勝手な要求、勝手な期待をします。また、牧師も、奥さんにはなんでも「我慢しろ」と言つてしまいます。奥さんはそれを持つて行く場所がないかもしれません。女性は話を聞いてもらうだけでストレスの解消になると言われますが、それでも誰にでもいうわけにはいきません。ご主人はいつも他人の話は親身になつて聞いても、自分にはあまり耳を傾けてはくれません。

私も家内によく言わされました。「何度も言つていたのに、あなたは真剣に聞いてくれなかつた」と。グーの音も出ませんでした。

○夫婦がバラバラなら、 すべてがこわれる

もう一つ、どの教会でも、クリスチヤン夫婦に対する学びの機会が非常に少ないよう思います。聖書から夫婦のあり方や家庭のあり方についてよく教えられないで、教会の柱であるべき夫婦がバラバラで、子供の教育や信仰継承ということにおいても問題を抱えている家庭が多いですね。

牧師夫人の多くが、牧師以上にストレスを抱えています。この世の奥さん方も、「私のストレスは、夫です」などと言っています。それに答えていくのが教会の大切な使命でもあるのです。

それぞれの家庭がしっかりと信仰に堅く立つて歩んでくれないと、教会の成長はありません。その中でも、家族の土台である夫婦がバラバラなら、すべてがこわれてしまます。そこを何とかなければ教会の将来はない、その危機感を持つて今の働きをしています。妻は専門のカウンセラーとして具体的な指導をし、私は聖書からと、ペアで働くのを理想としていたので、今、それができていることを感謝しています。ある教会には、毎年ふたりで招かれ夫婦セミナーを続けています。

○双子の娘から 教えてられたこと

もう一つ、二人で子育てを楽しんでいます。忙しくしている私たちを心配してよく連絡をくれますし、自分たちが大変な時には「祈つて！」と課題が送られます。良き友となってくれた息子に感謝しています。

牧師の仕事は、一人の息子の父としての仕事に勝るものではありません。子どもが生まれた時から一日も欠かすことなく、魂の救いを得、幸せな人生を歩んで欲しいと、必死になつて祈つてきた私たちですが、神のあわれみは私たちの未熟さや弱さをカバーして余りあるものでした。

牧師の仕事は、一人の息子の父としての仕事に勝るものではありません。彼のためには毎日祈つていましたが、ある日「そのままの息子を受け入れなさい。私は彼を愛し、彼のためにも十字架にかかるのだよ」という主の声が迫つて来ました。その瞬間、私は神の前に膝まづき、「彼を変えてください」という祈りを続けていた自分の罪を悔い改め「主よ。私は息子を本当に愛しています。愚かな私を赦してください」と祈りました。とりあつかわれなければならなかったのは、私の心だったのです。それから、感謝なことに親子関係は変えられて行きました。

「神は私のとりで、私の恵みの神であられまます」（詩篇59篇17節）

今、息子は障害を持った方々に仕える仕事に召されています。また主は彼にすばらしい伴侶と娘を与えてくださ

り、二人で子育てを楽しんでいます。忙しくしている私たちを心配してよく連絡をくれますし、自分たちが大変な時には「祈つて！」と課題が送られます。良き友となってくれた息子に感謝しています。

牧師もしくは牧師夫人が、うつになつたり、そのことで牧会を離れなければならぬというケースも年々増えつたります。そのような方々はみな、異口同音に言います。「相談をもちかける場所がない」と。そういう呼び方に、どこかでだれかが応えていかなければ、これから若い人たちは続かないのではないかと思う。自分の教団の中ではなかなか話しつくいという不思議な現象があります。

牧師もしくは牧師夫人が、うつになつたり、そのことで牧会を離れなければならぬというケースも年々増えつたります。そのような方々はみな、異口同音に言います。「相談をもちかける場所がない」と。そういう呼び方に、どこかでだれかが応えていかなければ、これから若い人たちは続かないのではないかと思う。自分の教団の中ではなかなか話しつくいという不思議な現象があります。

○働きのための広い門

「あなたの恵みを私は楽しみ、喜びます」（詩篇31篇7節）

私たち夫婦は人生の最終コーナーを曲がろうとしています。その先に神が用意していくくださる奉仕についてよく夫婦で話し合います。聖書には「広い門が：開かれて」（第一コリント16章9節）いる、そしてそれは「主の働きのため」とあります。かつてない長寿を与えたこの国での働きは本当

○家の話しさをキチンと聞く

パンクーバーに着いて最初に神さまが私に迫られたのは、家の話をキチンと聞くことでした。私は「自分は世界で一番良い夫だ」というあきれた双子の娘です。3人の子どもたちが何とかなれば教会の将来はない、その危機感を持つて今の働きをしています。妻は専門のカウンセラーとして具体的な指導をし、私は聖書からと、ペアで働くのを理想としていたので、今、それができていることを感謝しています。ある教会には、毎年ふたりで招かれ夫婦セミナーを続けています。

牧師もしくは牧師夫人が、うつになつたり、そのことで牧会を離れなければならぬというケースも年々増えつたります。そのような方々はみな、異口同音に言います。「相談をもちかける場所がない」と。そういう呼び方に、どこかでだれかが応えていかなければ、これから若い人たちは続かないのではないかと思う。自分の教団の中ではなかなか話しつくいという不思議な現象があります。

私たちには3人の子どもがいます。東京の世田谷で生まれた息子と、アメリカのオレゴン州ポートランドで生まれた双子の娘です。3人の子どもたちがもう成人し、それぞれに責任のある仕事を持っています。子どもたちを育むことは、私たちには大きな喜びでありますが、それ同時に、多くの失敗もありました。子どもたちは親に、信仰の実践のアリアリティを味わわせてくださいました。子どもたちは親に、信仰の実践のアリアリティを味わわせてくださいました。

長男千尋（ちひろ）は、生後半年で誕生日と共に渡米し、七年間をアメリカで過ごしました。この間、周りはほとんどがクリスチヤンで、息子は教会で活動、英語と日本語の両方の中途半端さなど、その頃の息子は、自分のアイデアで遊んでいました。

彼は帰国後、英語が話せるということがわかった。しかし、それは、もう一度二つの関係を再構築して、これから新しいビジョンに向かって二人で進んでいきたいと願う幸いになりました。

私は家内に謝らなければなりません。前だつたように思いました。

私は家内に謝らなければなりません。前だつたように思いました。